

令和元年6月17日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02939

研究課題名(和文) 海外留学における第二言語動機づけの変化：複雑系理論を用いたナラティブ・アプローチ

研究課題名(英文) Effects of study abroad experience on L2 motivation: A narrative approach utilizing complexity theory

研究代表者

新多 了(Nitta, Ryo)

名古屋学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：00445933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では大学在学中に英語力はどのように発達するのか、また留学を経験することで動機づけがどのように変化するのか、複雑系理論およびナラティブアプローチを用いて調査を行った。分析の結果、ライティング力においては留学経験を通じて、流暢さに顕著な発達が見られた一方、その他の側面については大きな個人差が見られた。また、留学前後に行なったインタビューの結果、長期にわたって高い動機づけを維持している学習者は、高い主体性(learner agency)を持っていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は近年大きな注目を集めている複雑系理論の視点から、留学期間中の学習者の動機づけの変化とその要因について、ナラティブアプローチの手法を用いて詳細に検証するこれまでにない試みである。留学経験が個々の学習者の動機づけにどのような影響を与えるのか、様々な学習者の事例を蓄積することで、今後留学前の学生指導プログラムや留学中および留学後のサポートなど、日本の教育機関における留学制度の充実に大きく貢献できる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated how students' L2 writing and language learning motivation changed through study abroad experience. The results of writing task show that their writing fluency markedly improved but different extents of improvement were observed among different learners in the other dimensions (e.g., syntactic and lexical complexity). The result of interview analysis suggests that learners with long-standing motivation tend to be armed with learner agency throughout their language learning career.

研究分野：第二言語習得

キーワード：ナラティブアプローチ 複雑系理論 ライティング 動機づけ 海外留学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究ではこれまで、海外留学によって第二言語を使用する機会が増えることで、様々な言語的側面が発達することがわかっている(例えば Segalowitz & Freed, 2004)。研究代表者らも、留学経験により日本人大学生が英語スピーキングにおいて流暢さとともに、自然な会話パターンを身につけることを示した(Nitta & Nakatsuhara, 2014; 科学研究費補助金課題「タスク前計画時間が留学前・後学習者の会話構築パターンに与える影響」平成 25～27 年度)。

海外留学は多くの大学生にとって自身の「学習歴における重要な意味を持つ経験」(Benson, *et al.* 2013)であり、第二言語コミュニケーション能力だけでなく、価値観や自己効力感、アイデンティティなど、心理面においても大きな変化をもたらすと考えられる。先行研究では留学出発前と帰国後に質問票を使った調査が行われ、留学を経験することで不安が減少しコミュニケーション意欲が高まったことなどが報告されている(例えば、八島, 2009)。しかし留学前後に質問票を用いる方法では、学習者の動機づけが留学環境とどのように相互作用するのか、また時間経過とともにどのように変化するのか捉えることができない。

伝統的に動機づけは静的であり変化しないと考えられてきたが、近年は複雑系理論の視点から、学習者の様々な内的要因および外的環境要因と複雑に相互作用し常に変化するものと考えられるようになってきた(例えば Dörnyei, *et al.*, 2014; Ushioda, 2014)。研究代表者らはこれまで、第二言語動機づけ研究の第一人者である Zoltán Dörnyei らが企画した書籍 (*Motivational Dynamics in Language Learning, Multilingual Matters*)に論文が採択されるなど、複雑系理論の視点から第二言語動機づけに関する研究を行い、日本の大学の英語教育環境における学習者の動機づけの変化に関する研究を行ってきた(Nitta, 2013, Nitta & Baba, 2015)。

学習者の動機づけ変化を理解するため様々な研究方法が試みられているが、そのひとつとして「ナラティブアプローチ」が大きな注目を集めている(Dörnyei & Ryan, 2015)。ナラティブアプローチは、具体的なエピソードの語りにおいて、個々の学習者が過去の経験をどのように意味づけし、それが現在の自己認識と理想とする将来像にどのように影響しているか理解することで、動機づけと学習者の内的要因および外的環境要因との相互作用を理解しようとする研究方法である。申請者らはこれまで、一年間に渡って英語授業で採取した学習者の内省データをナラティブアプローチの手法を用いて分析し、学習者が過去の経験を基盤とした理想像を持つことが動機づけの維持につながることを示した(Nitta & Baba, 2018)。

2. 研究の目的

上記の研究背景およびこれまで研究代表者らが行ってきた研究成果をもとに、本研究では大学在学中に英語力はどのように発達するのか、また留学を経験することで動機づけがどのように変化するのか、複雑系理論およびナラティブアプローチを用いて検証を行った。具体的には以下の通りである。

- (1) 大学英語授業の中でライティングタスクを実施し、留学前の英語ライティング力の変化を検証する。さらに、留学後(3年次)に同じライティングタスクを実施することで、留学前後にどのように発達したか、分析を行う。
- (2) 長期海外留学に参加した研究参加者に対して、自身の動機づけと留学経験について留学前と帰国後にインタビューを行う。分析結果をもとに、留学前、留学中および留学後どのように動機づけが変化したか、またどのような内的要因(例えば、性格、英語力に対する自信、将来像の明確さ)及び外的環境要因(例えば、留学先の学習環境、友人やホストファミリーとの関係性)が学習者の動機づけの変化に影響を与えたか検証を行う。

3. 研究の方法

ライティングタスク

大学一年時英語授業の中で、ライティングタスク(10分間1つのトピックについてできるかぎりたくさん英語で書く)を毎週1年間繰り返し行った(計30回)。また、ライティングタスクを行った直後に、毎回その日のパフォーマンスを振り返り、学習動機アンケート(どれくらい一生懸命書いたか、自分のライティングに満足しているかなど)に回答した上で、様々な項目(語彙・文法、内容、構成、今後の目標など)についての内省文を日本語で書いてもらった。また、同様のタスクを、長期留学終了後にも実施し、ライティング力の変化を測定した。

インタビューデータ採取

留学経験が参加者の価値観や動機づけの変化に与えた影響についてより深い洞察を得ることを目的に、研究参加に同意した長期留学留学に参加する日本人大学生10名(長期留学生5名、中期留学生5名)に対して、留学前(2016年7月)および留学後(2017年1月および6月)にインタビューを実施した(合計約20件)。

データ分析

採取したライティングおよびインタビューデータの分析は以下の方法で行なった。

- (1) ライティング力の量的分析:採取したライティングデータは英語分析ツールのText Inspectorを用いてデータの整理および分析を行った。具体的には、研究参加者の流暢さ、語彙的複雑さ、統語的複雑さの変化を分析した。
- (2) インタビューデータの質的分析:ナラティブアプローチの手法を用いて、留学前後および留学中の参加者の価値観や動機づけの変化について分析を行なった。

4. 研究成果

研究参加者の多くは、1年間の大学授業の中で繰り返しライティングタスクに取り組むことで、全ての言語的側面(流暢さ、語彙的複雑さ、文法的複雑さ)においてある程度の発達傾向が見られた。一方、留学後に実施したライティングタスクでは、流暢さにおいてさらに顕著な発達が見られた一方、その他の側面では個人差が見られた。具体的には、以下の通りである。

- (1) 大学の英語授業において毎週継続的にライティングを行うことで、様々な側面である程度の発達を促すことができるが、効果は限定的である。一方、留学を経験することで流暢さにおいて顕著な発達が期待できる。
- (2) 留学後は、学生によってより語彙的複雑さが発達する場合と、より文法的に複雑さが発達する場合が見られた。個々の学生が持つライティングに対する意識によって、発達にすると考えられる。
- (3) 流暢さはライティングの発達を測定する最も信頼性の高い指標だと考えられる。同様の結果は研究協力者の異なる研究でも示されている(Baba, in press)。

また、インタビューでは、幼少期あるいは小学校・中学校で初めて英語に触れた経験から、大学で英語を専攻すること、留学を決断した理由についても様々なエピソードを紹介しながら説明してもらった。また、留学中の英語学習およびそれ以外の活動に関する様々な経験についてエピソードを用いて詳しく語ってもらった。

留学前後に行なったインタビューをナラティブアプローチの手法によって分析した結果、留学期間を含めて英語学習に対する高い動機づけを長期間に渡って維持している学生の特徴として、様々な活動に主体的に取り組む姿勢(learner agency)が顕著に見られた。具体的には、授業などで与えられ

た課題をこなすだけでなく、自ら自分の英語力や学習状態について主体的に振り返り問題点を見つけ、それを克服するための方法を探して主体的に取り組んでいることがわかった。

本研究は近年大きな注目を集めている複雑系理論の視点から、留学期間中の学習者の動機づけの変化とその要因について、ナラティブアプローチの手法を用いて詳細に検証するこれまでにない試みである。留学経験が個々の学習者の動機づけにどのような影響を与えるのか、様々な学習者の事例を蓄積することで、今後留学前の学生指導プログラムや留学中および留学後のサポートなど、日本の教育機関における留学制度の充実に大きく貢献できる。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 5 件)

1. Baba, K. & Nitta, R. (2019). Exploring dynamic developmental trajectories of writing fluency: Who benefits from the writing task? (Colloquium: "Exploring L2 Writing Development from a Complex Dynamic Systems Theory Perspective" organised by Gary Fogal). American Association for Applied Linguistics (Atlanta, US).
2. Nitta, R., Nakata, Y., & Tsuda, A. (2018). Emergence of socially-shared regulation in English classrooms: A complex dynamic systems perspective. Psychology for Language Learning (Waseda University).
3. 新多 了. (2017). 第二言語習得研究への複眼的アプローチ: 共通性から多様性へ (招待講演) 大学英語教育学会(JACET)中部支部 2017 年度講演会 (中京大学)
4. Shintani, N., Nitta, R. et. (2016). Impact of task repetition on L2 learning: Multiple perspectives (Colloquium). Pacific Second Language Research Forum (Chuo University).
5. 新多 了. (2016). タスクのくり返しと英語ライティング発達: 複雑系理論からの長期的研究 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会 (獨協大学)

[図書] (計 4 件)

1. Nitta, R. (in press). L2 writing development and individual differences in learner agency: A retrodictive approach. In G. G. Fogal & M. Verspoor (eds.), *Complex Dynamic Systems Theory and L2 writing development*. Amsterdam: John Benjamins.
2. Nitta, R., & Nakata, Y. (in press). Understanding complexity in language classes: A retrodictive approach to researching group dynamics. In R. Sampson & R. Pinner (eds.), *Complexity Perspectives on Researching Language Learner and Teacher Psychology*. Bristol: Multilingual Matters.
3. 新多 了 (印刷中) 『「英語の学び方」入門』 研究社
4. Nitta, R., & Baba, K. (2018). Understanding benefits of repetition from a complex dynamic systems perspective. In Bygate, M. (ed.), *Language learning through task repetition* (pp. 279-309). Amsterdam: John Benjamins.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 馬場 今日子

ローマ字氏名: Baba Kyoko

所属研究機関名: 金城学院大学

部局名: 文学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30454333

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。